

| | | |
|---|------------|-------|
| 仏語明要 | | |
| A F -206 | 元治元年(1864) | 村上英俊編 |
| 我が国最初の本格的な仏和辞典。フランス語学者村上英俊の代表的な著作物とみなされている。 | | |

- ◆ 幕府が蕃書調所にフランス語科を設置したのは、安政6年(1859)に村上英俊(1811-1890)を教授手伝に任命したことに始まる。英俊とフランス語との出会いは、ベルツェリウス(J.J.Berzelius スウェーデンの化学者)の化学書であったという。蘭学を修めていた英俊は、ベルツェリウスの著作「化学提要」のオランダ語訳を注文したにもかかわらず、なぜかフランス語訳が送られてきてしまい、否応なしにフランス語に相对せざるを得なくなった(このいきさつには異論もある)。彼は、これをきっかけとして、それまであまり目を向けられていなかったフランス語の研究と著作を開始する。

英俊のフランス語に関する著作は数点あるが、その中でも特筆すべきものが『仏語明要』である。これは、本邦最初の本格的形態と内容をもつ仏和辞典であり、その後編ともみなされる『明要附録』(明治3)と併せて、英俊のフランス語研究を評価する上で重要な著作とされている。全4巻、総語彙数は35,127を数える。英俊はこれ以前にも『三語便覧』『五方通語』等の辞典を編纂しているが、本書はこれらのものとは異なり、右綴じ、横書き、アルファベット順の語彙の配列という体裁の変化に加え、品詞の区別、動詞の活用、成句等の面で大きな進展が見られる。

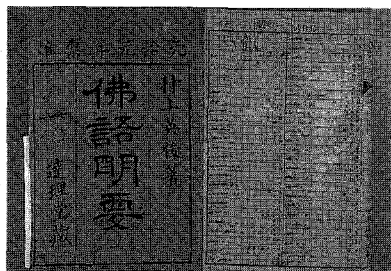
慶応3年(1867)、村上英俊は9年間にわたって関係をもった開成所を辞め、フランス語塾を開いた。一般には「村上塾」と呼ばれていたが、公式には「達理堂」の名称が用いられていた。英俊の著作物は『仏語明要』を含め、すべて「達理堂」の名で刊行されている。

本書は、仕官学校の生徒達に使われたり、フランスへの留学生に携行されたりと、広く使われていたらしい。そればかりか、英俊自身が邦訳した『仏蘭西答屈智機』(ふらんすたくちき 慶応3(1867) AJ-25)、『西洋史記』(明治3(1870) K083-100)の翻訳にも利用された可能性もある。

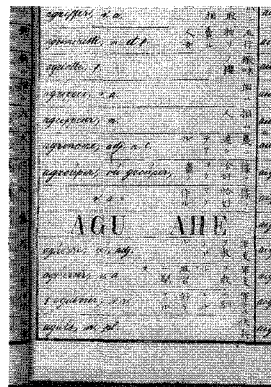
- ◆ 当館は全4巻の完全なセットを7部所蔵している。それに加え、第2巻(E~I)1冊、第3巻(J~P)9冊、第4巻(Q~Z)9冊がある。「駿府学校」の印記があるが、幕府の旧蔵機関を示す印記はない。虫損は少なく、全巻とも保存状態は良好である。

<参考資料> 『ふらんす語事始』(850.2-1)

『フランス語事始-村上英俊とその時代-』(850-10)



16 仏語明要



16 仏語明要